



今月は市内の引きこもりの方の支援を行っているNPO法人にりん舎代表の田口泰大さんを紹介いたします。

田口さんは以前、障害者施設や就労支援センターなどに勤めており、就労支援をする中で、子どもの引きこもりに悩む両親から相談を受けることが多くあったそうです。また、県南部や都内の引きこもり支援を行う団体の見学、研修に参加する中で「自分も引きこもり支援をしていきたい」との思いが強くなり、市内や近隣市に引きこもり支援をする団体が無いことから同法人を設立しました。

主な活動内容は電話や訪問、メールなどで引



気持ちに寄り添いながら社会と繋がるきっかけを

田口 泰大さん（埼玉・49歳）

引きこもりの方や、そのご家族などからの相談を受けること。また、火・土曜日には公民館などでゲームやイベントなどをして過ごせる「居場所づくり」の活動もしています。

田口さんは引きこもりの方について「何か生きづらさを抱え、それを声に出せない人たちがいますが、誰もがなり得るものです」と語ります。そして、こうした方への支援について「この人がどんなことを思い、苦しんでいるのかを知り、その気持ちに寄り添う」ことが大切であると言います。

田口さんの支援は、単なる「居場所」の提供だけでなく、引きこもりの方々にとっては自信を取り戻し、社会との繋がりを再構築するきっかけにもなっています。実際に支援を受けた方々からは「心の支えになった」との声も多く寄せられ、活動の成果が実を結んでいます。こうした支援が地域全体に浸透することで、より多くの人々が心のケアを受けられる社会が実現することが期待されます。

今後はさらに活動を広げ、「引きこもりに対する偏見を持つ方にも理解を深めてほしい」と語る田口さん。田口さんの願う地域ぐるみによる、引きこもりの方への支援の輪は少しずつ広がりを見せています。

大人のためのミニ朗読会（若葉）

- ▶日時 5月18日(日)午後1時30分～2時40分(午後1時開場)
- ▶場所 中央公民館第1学習室
- ▶内容 ・「霊長類ヒト科動物図鑑」より「良寛さま」向田邦子/著 文春文庫
・「二平方メートルの世界で」(絵本) 前田海音/著 小学館 他2作品
- ▶定員 70人(先着順)
- ▶協力 行田朗読の会

子ども映画会

- ▶日時 6月8日(日)午後2時から
- ▶場所 図書館おはなしのへや
- ▶内容 ふしぎ駄菓子屋 銭天堂 第34～36話(30分)
- ▶対象 幼児・小学生およびその保護者

英語であそぼう

- ▶日時 5月18日(日)午前11時から
- ▶場所 図書館おはなしのへや
- ▶内容 英語の歌遊びや絵本の読み聞かせ
- ▶対象 幼児・小学生

雨天時に本を持ち運ぶ際のお願い

雨天時に図書館の本を持ち運ぶ際は、本が濡れないようビニール袋などに入れてください。借りた本を雨や飲み物で濡らした場合は、弁償の対象になりますので、返却する際に必ずカウンターまで申し出てください。

本は、多くの利用者にお貸ししている公共の財産です。大切に扱いましょう。



開館時間

午前9時～午後7時

休館日

5月 7日(水)・12日(月)・19日(月)・26日(月)、
6月 2日(月)・3日(火)・9日(月)

※休館日の図書の返却はブックポストをご利用ください。

●市立図書館●

佐間3-24-7(「みらい」内)

TEL:556-4227

FAX:555-3770



行田歴史系 374

葬送儀礼に使われた須恵器



亀裂が入った須恵器大甕 (行田市教育委員会所蔵)

郷土博物館常設展示室「古代の行田」中央に展示している酒巻8号墳(前方後円墳)から出土した須恵器について、最近再修復した際に分かったことを紹介いたします。須恵器とは、古墳時代に朝鮮半島から作り方が伝わり、窯を使って1000℃～1200℃度の高温で焼き上げた灰色の硬い土器のことです。

酒巻8号墳の須恵器は、昭和57(1982)年の暗渠敷設工事中に発見されました。前方部付近の円筒埴輪列の脇から大甕・中甕・横瓶などがまとまって出土し、酒巻8号墳の葬送儀礼が執り行われたと考えられます。その後、バラバラに割れた状態で出土した須恵器を組み合わせて接着し、破片が足りない部分を石こうで復元・補強しました。復元から月日が経ち、接着部分や石こう部分が劣化してき

たことから、石こうを全て取り除き、破片を組み合わせたところも全て取り外して、再接着して樹脂で復元・補強し直しました。

その際、大甕胸部の一部に隙間が空いて繋がらない部分を確認されました。基本的に破片断面の中央はあまり熱を受けないことから、赤茶色になることが多いのですが、繋がらない破片断面を観察すると表面と同じ灰色になっていることが確認できました。おそらく窯の中で焼いている最中に胸部が割れて亀裂が入り、そのまま焼かれて断面が灰色になったものと想像できます。当初の復元時、大甕の胸部が少しゆがんだ形態だと感じましたが、今回の修復により亀裂が入っていたためだと理解することができました。

加えて、水や酒など液体を入れる大甕を亀裂が入った状態で古墳まで運び、容器としての機能を果たさない大甕を古墳に供えて葬送儀礼を執り行っていた可能性が高いことも明らかになりました。その他の須恵器にも打撃を加えた痕跡を確認できるものもあります。博物館に展示している実物の須恵器をご覧いただくと、古墳時代の人々がどのように葬送儀礼を行っていたのかを垣間見ることができるようではないでしょうか。

(郷土博物館 篠田泰輔)

俳句 田

ぎょうだ はいだん

俳句応募方法

一人3句以内。住所・氏名(ふりがな)・電話番号を明記の上、はがきまたは封書で広報広聴課まで。※毎月末日必着
なお、「一部添削して掲載する場合がありますが、不要であれば「添削不要」と記載してください。

針も手も錆びてもどかし花の冷え 南河原 今村 文女

【句評】生きとし生けるものにとって避けて通れないものが老いである。かつては晴れ着まで仕立てたこの手が今では針を通すことさえままならないと作者の嘆きが聞こえそうである。絶望的な内容ではあるが、季節に「花の冷え」を据えたことにより「一縷の希望を感じさせて救われる。豊富な句歴を持つ作者らしい背景のふれない一句である。」

三月の塀にたはむる水の影 棚田町 川鍋 幽覚

【句評】川沿いの土塀などに光の反射で水の影が躍っているような光景を見かけることがある。浮き浮きとした春の季節感が一句の中に溢れている。俳句はやたら難しい表現を使うように思われがちであるが、平凡な表現であっても奥の深い句はたくさんある。掲句は目前の景をそのまま詠んでいるだけであるが、格調高い一句に仕上がっている。

青き踏む昭和平成令和踏む 谷郷 森 洋子

【句評】名詞を羅列する句にあまり名詞はないが、掲句は「踏む」のリフレインが絶妙の効果を感じている。季語の「青き踏む」は、一步一步春を踏みしめながら歩む成人老人の姿のことである。たんとと三時代を生き抜いて来た作者の人生をさり気なく詠嘆して共感を覚える。主観を押さえて客観で詠んでいるが、気負いがなくてよい。

蹲いにつがいの目白羽づくろい 忍 大澤 由子

末黒野や夕日大きく山に入る 門井町 宮田 淑尚

佐保姫に祈る戦下の民のこと 持田 中野 華泉

荒行の長瀬火渡り春つげる 和田 小林 博矣

十字架の刑を解かれし木々に春 小見 三宅 典之
雛飾る遺影の母の誕生日 緑町 松林 真弓
地下足袋の馴染む頃なり畔青む 埼玉 萩原 増夫
(三沢一水選評)